大伴金道忠孝圖會 後編 五

へ13
2692
10

宮内省圖書寮

2692
10

大伴金道忠孝圖會後編卷之四

目録

芦城山砦合戦并大友勢敗軍
芦城の山塞と大友勢敗軍の図
虎躬焼芦城山樹木并金道丸射虎躬
金道丸遠矢と虎躬を射る図
避金烏出馬金道丸主従抜落
金烏改名并雅明築新城勧奢侈
湯の嶽の殿舎結搆び盡を図

妖僧道智弄幻術并真鳥百濟掠貢物
春衝創軽寺天皇行幸并金道丸助貴曹
飛鳥川遊びゝ金道丸艸壁王の若君を救ふ図
金道丸元服改名并栗隈謀真鳥
道智修法真鳥殺愛妾
密書紛失ゝ曰く櫻内侍真鳥ゝ殺さる図
藤井奪密書逐電并栗隈密上洛
雅明説宝劔由來并道智偷熟田神宝

大伴金道忠孝圖會後編卷之四

浪華　好花堂野亭著編

芦城山岩合戦并大友勢敗軍

子貢一度舌を動して魯國の危急を救ひ孔明一度舌を鳴して呉國干戈を動せり可謂利舌の功亦大也とされど垣雅明智舌を以て大友金烏が出馬を止り。立石虎躬と芦城山の征兵小向并夜間を行ひて後患を除んと欲し。宿所に飯く一通の密書を書。腹心の郎黨小密意を云含て夏を持せ。夜中小打立せて芦城山の砦へ赴せ給ふ。是より前小芦城山の呼名小橋白虫金道丸を將て入城し給れば木高連蔑大小悦び金道丸を重く尊敬し。何卒金烏を伐亡して再び大伴家を興んと愈徒黨を集め已小三百五十余人小及び金銀兵糧も十分満足なるを衆人悦び勇を金烏と伐亡軍纖小の日を送りける。然小怒ち

垣の雅明が密使きたり雅明が密書を呈す〳〵るふよう。太息白虫木高連蒐們
何事ぞやと披見もろふ立石虎躬が戦を生捕て跨間せよう。芦城出ふ金道
九白虫其余の人々住居もる吏露顕す。金烏出馬をづれ由云々と言縁〳〵
く止め。虎躬。金鍬千五百騎ふく征兵ふ向あのぶ。竜城の用意〳〵。謀略を廻
〳〵虎躬を紂取ぶ〳〵の議と書〳〵よう。四人の輩大いふ歓れ太息及書と書
く雅明が密使ふ持せ帰〳〵ち。偖金道九を上座ふ坐せ〳〵ち軍議とどなす〳〵
白虫先言を発す〳〵。此砦へ金烏大軍て従て向ふ。竜城甚だ難義なるふ。雅
明が働ふく金烏の出馬ふ止〳〵ハ。稚君及び我們の幸福なり。然ども彼虎躬を
金烏が股肱の臣ふて武略逞〳〵手物把ても嗚呼の手兵なれば彼を紂〳〵ぶ
金烏が厅翼を断が〳〵。後日金烏を謀ん時の大なる便と成ぶ〳〵。それも渠
も智勇の一人なれば等閑の紂畧ふく〳〵ハ紂取ぶ〳〵列位思ふ旨あ〳〵演らるべと

言々れば支摩木高進と出今我們の手ふ属もる者僅三百四五十人然も烏合の
集り勢ふく霸盗の業ふハ到れども。合戦の進退と知者ハ少〳〵。敵ハ千五百人ふて
兼て軍戦の調煉ふ熟〳〵る者なれば拒敵難〳〵ん。豊前の文屋廣島殿を
稚君の母公芙蓉方の舎兄ふく。稚君の為ふハ叔父なれば彼家ふ加勢かと。又筑後
乃阿蘇栗隈殿ハ大伴家の古れ縁者ふく亡君と交り深〳〵ぶ。是も勢と
借〳〵合戦ふ及んを如何ぶ成れと言々ふ。連蒐是と申ふく。否〳〵廣島殿ハ芙蓉の
方と金烏ふ責殺され遺恨と挾もる者なれども領地狭く兵士ふ〳〵ぶ。金烏が
罪と紂とる能ぶ。猶金烏が下知ふ従ひ居れば。稚君の御為なりとも容易ふ
加勢も出さんぶ。又阿蘇栗隈殿ハ一門なれども稚君世ふ在る成知ぶ。
對面もなく〳〵ハ加勢とも疑惑と加勢有ぶ。又里數遠〳〵て千遠
なり只此地を立去来銳を避く再び吏と繰るふハ如〳〵ん。云々。亀山

ゆゆく首を振。両士の論いまだ可かず。我曾て此山塞を攻んとする者有ん時乃要害ふ石畳を堅し足場を構拔道をきえ堀通し置られば。千騎二千騎乃敵押寄とも恐るゝふ足だに勿論今度の合戦ふ金烏が首を得ん事ハ難しと云へば虎躬と対ん事ハさのみ難ふあらじ。雅明心を尽し虎躬と向ひ我使ふ対せんとする。金烏が勢を削る策なり。是范増減て項羽が鋒矢弱りしとは也ふ雅明が深き計を用ひど當所を退む。智もなゝ勇もなゝと見限て雅明再び味方為ふ力を用ひ。素り軍ハ勢の多ふよりも将ある者能下知を傳へ士卒心を一致して戦で大敵とらんとも破つ可し。況味方ハ嶮阻の要害ふ倚て戦たり。敵ハ多勢なりとも地理不安内の容戦なり。他人の勢を借ふも及ど退去する也時早うるべしと言ふふ白虫甘黙首亀山殿の議論我が心と符合ふを虎躬と対ん事我方すの内ふ多り先軍配を定むべし。木高連蒐両士ハ各暮

づの士卒を従へ山の半腹乃深林又ハ谷間ふ埋伏し。合戦始りて岩の上ふ白旗と揮で木高伐て出。赤旗を揮で連蒐突出し。敵の後より切崩もべし。敵敗走ども長追せで手柱乃上人を立て敵を追べし。自己の手柄を事ふせど互ふ相扶け。進ば紅旗を揮で一斉ふ進。退ば紅旗を揮で一日ふ退べし。若軍令を背て高名をすとも賞を与ど却て罰をべし。虎躬とぞふ対取で。残兵を已と幣へ走べん。敵を恐るゝ勿迫。大木大石を城中へ運せ。切所〻ふ柵を造り逆茂木を植或紙旗紙旌を造り他所へ赴ば者八人を分て呼返し。岩ふハ櫓を建て並べ紙旗紙旌を多く立連れ如何ふも大勢の楯篭るべく構十分准備を整相待乃時白鳳四年冬十月中旬大友の皇子を石虎躬。那古金鍬一千五百騎の士卒と引率し芦城山の岩を攻伐。彼及忠して紙人せし丹生樫根を眼代して臼杵と発ち筑前國芦城山の妹處まで押寄。一山の休を乃ふふ巌石畳〻〻〻〻

羊腸たる坂道急峻高嶺峩々と聳えたり。虎躬先驀ふ陣を取金鍬と
綴りて曰此山思ひのほかに陰阻あれども。楯篭る敵八僅ふ二三百人ふ過ぎず
然も山賊野盗の集勢なれば恐ふ足ず。郡辺五百騎を引率し攻登り泡
吹らんへと下知しなれば金鍬欣然として承引し。五百騎を従へ打立螺を吹太
鼓を鳴して軍威を示し。喊を発て陰れ坂道を押登るふ廿丁許り山砦
に近寄り。金鍬馬を降て杏ふ見れば砦ふハ数多の旗旒を立て山風ふ吹靡
し堀際ふハ柵逆茂木厳重ふ構へり。金鍬案ふ相違まふがり。分の知らず山
賊ども何程の事ふ有ん進や者どもと下知をふぶ。逸雄の者ども一同ふ喊を発
一斉ふ攻寄るふ。城中ふハ鳴を鎮め音もせず。偖ハ旗旒のみを置疾逃矢し
たるぞ〳〵。我先ふと馳登逆茂木を手毎ふ抜捨近く寄付る。塞中ふハ飽
く敵を引寄白虫櫓より〳〵と人を〳〵。時ふハよと相図の採を揮と比く

砦中の諸卒喊を噇と造り。積賂〳〵大木大石を投落もふぶ。寄詰し士卒
忽ち圧ふられて死る者七八十人其他頭手脚を折れて一驚を喫ひ人
なだれ〳〵敗退き々る。此時砦の門を八字ふ開うせ。白虫木兎若を首と〳〵
大伴家の浪士野武士山豪得物〳〵を打揮て。山の崩るが如く蒐出高よ
捲り落して打て下る。乾中木兎若八天性力量衆ふ勝れ父ふ秘蔵の石
切の大太刀真額ふ受て当れば幸ふ切て〳〵曠く内ふ五六騎切て落し
七八人手を肩ふ白虫八老煉の剛兵なれば縦横無尽ふ薙立敵を討て
数多ふ見ふ連て相従士卒も勇気を厲し切立ふぶ。さらの金鍬堪
へず。散〳〵ふ乱強れて敗走し。白虫敢て長追せず。勢を班て手柱く砦
引取門戸堅く守る。立石虎躬八金鍬が敗軍と言甲斐なく思ひ自ら
七百余騎を引率し。新手を以て喊を発攻登り己ふ堀際近く攻寄城戸

芦城山の
砦を攻て
大友勢
毎度

利を
失ふ

を破んとする時しもあれ砦より又木石を投下し或八雨のごとく矢を射下しくるゝを
ゞ寄兵又丈く壓殺され矢の下ゝ金と落ち者數多なれど是ゝ恐まて支
度路ゝ引退くと。砦中より見さゝ。亀山太息敵ゝ面を怒まゞと。頻當ゝ
面体を隠し一丈余の擬の提を打揮。百金騎の真先ゝ立て出奮地くゝ
薙立る。寄兵愈乱立て敗下る。虎躬大ゝ怒り。機を奴原ゝ敵ハ小勢ゝ
取籠て一騎も余さゞと討取よと身を揉で下知。退く味方を鞭ゝて懲くるゝ
より是ゝ励まれて脚並を整し挑く戦ひくる。敵ゝ白虫ハ櫓の上より時ゝハよと
白旗を打揮くれど支摩木高百金騎おゝ成林の内より起て立。敵の後を
喊と発ておゝるゝ。虎躬驚て急ゝ勢を引て木高ゝ兵と打戦ふ白虫又
赤旗を揮立れど。伴連雄百余人を率て樹木の中より大ゝ鬨を発て殺出し
敵勢の半へ打て入無三無三ゝ薙立る。寄兵再び驚て三手の敵ゝ揉立られ手

負死亡疑く只路を求て敗る斗ゝて敵ゝ向ふ者ハ希なりくゝ。木高連蒐を
亀山と一隊ゝなり。喚叫ぶ嵩より搦落しくるゝより。虎躬心紆ハ矢猛あれども道
ハ険しく岩石ゝ足場悪く。且地理を知ざれハ進退不便なり。敵ハ案内ゝ精れ
た。此所ゝ頭を彼所ゝ廻りて打惑くるれ遂ゝ惣敗軍となり。引行勢ゝ続れ
て敗走くる。那古金鍬ハ禁廬の陣ゝ息を休く居くくるゝ味方の敗卒追
くゝ敗走くるゝ狭れ虎躬ゝ力を添人。新手の勢三百余騎を引く山上へ押
登人と蒐行れども。路ハ狭く坂を険し。敗下る味方ゝ押支られく登り得ぬ左右
もる内ゝ虎躬這くの体ゝく下り来くれど。今ハ力なく倶ゝ敗軍を収て禁廬の陣
へと引行る。城兵を十ゝ打勝首を得ること二百五十余級味方も七十余人戰死し
れども。物始うと勇悦び勝鬨三度上て砦中へと引入る

虎躬焼芦城山樹木　兵金道九射虎躬

芦城山の征将五石虎躬。那古金鍬初度の軍ゐお員勢を折りて三百余人手負
四百余人ゐ及ぶれば安らゐ夷ゐ思ひ虎躬百般思慮を廻し金鍬と商議して
曰ふ。敵ハ小勢しゐ盗賊の族なれば。軍の進退ハ知らずと緩思しふ白亜より兵
を用ひ防禦の備を密ゐし。奇兵を設て味方を伐悩しふ依て思の外ゐ敗を
取る。我熟ら敵軍の体を考るゐ。倉卒の篭城なれバ矢種も尽るゐ。兵粮
とても十余ゐ日ハ賄ひ得べけれバ味方根長く攻るなれば。十日を待ずして篭城叶ひ難る
べし。只敵の頼む所ハ此山黒生多く伏兵を隠ゐ便よゐのみなり。時今冬の初ゐ
て諸木黄落の折なれば。今宵二更の頃諸卒ゐ命じて所々の樹木ゐ火を掛させ
ゐば。一山の樹木過半焼亡し。敵再び伏兵を置所なからん其上ゐ縋を定め攻
るべしゐ此若客易陥落せぶと議しなれば。金鍬感伏し此策真ゐ妙也
と日意を。是ゐ於て虎躬士卒ゐ命じて枯草枯芦ゐを多く刈集せ。其夜の

二更の頃。二百人の士卒小件の焼草を手毎ゐ持せ山中へ登せ。所々の樹木の下ゐ
焼草を積み火をつけ。忽ち火々と燃上り。折しも冬の夜ゐ嵐励
く吹き満山一面の猛火となる。彼介子推を尋ねと魏隼ゐ満山を焼き給ひ昔も
斯やと思ハれ。若の諸卒是を見て仰天。是ハ如何と騒ぎ立ると白亜大息
是を制し。你們恐る事勿れ。是ハ敵将虎躬今日の敗軍ゐ手懲しに
再び伏兵を置せずとて樹木を焼なるべし。此若き程燃来る事ハ有まじ用心
のゐ水ゐ多く汲置ゐ。秘火ゐ防ぎ消防を催備せよとて。少も騒く
体なく兵士ゐ小鳴を鎮め。水を多く汲溜め。飛火来るを打消人を
氣を賦る。茲ゐ可笑すの百姓ハ大友方の軍兵ゐ山の焼る様面白すゐ思ひ
もくと林麓ゐ集て。数百人見物して群り立て山中の猪狼山の焼るゐ驚き追
くゐ蔓出草蔓とて逃下る。見物せ兵卒ども。大いゐ驚き騒ぎ強ち肥満人

其人声小猪狼怠おどろく。途を失ふて勇勢の中へ蒐入怒吼て牙ふりけ脚小蹴
立狂ひまどふぞ。猪卒倍狼損ふ突倒し押仆し我先小逃んとて仆る者乃
上へ仆重り。手脚を踏折れ或ハ已ぐ帯さる刀剣小て疵を被る者。又ハ猪の牙
小掛られ狼小噛ると平死平生小なる者數多ぞ。喚叫ぐ陣所へ逃うる。陣中小
残し者ハ敵方の鯨波とゆたぐ須驚夜討の人ごと斜ル強さ口士対する
も有虎躬金鏃も誠小敵の矛ぞと心得鎧投ケ馬小乗兼弓矢ふる防
んとまるふ敵と覚し者ハ一人ハ喧く罵騒ぎうたるる。能く安ル せぬ敵乃
夜討ふあるぞ。味方の猪卒猪狼小驚く逃散しと夜討と心得く騒動小及び
しなりそうく小鳴戦鎮まるふぞ。虎躬甚ぐ立腹し。組頭の者ハ を呼付て
散くふ叱り懲し ハ其者ハ皆恐入く罪と組多。然ども元来不意の蹉忽
より起し義あれど軍法小行ハ程の罪もなく。渋くふ吏ハ収りう。維ら傳へ聞

此吏山岳へ登ぼれ上下手と拍て一笑と催し。斯く両三日ふく立石虎躬
再び砦と攻んと一千余騎と四隊小ふる先陣労れふぞ二陣入替り。二陣屈せぬ三
陣入替り四隊の勢ふるく透間なく攻ふぞ。敵ハ入替る勢小ふく遂小力尽く
て落塞ぐべと軍議と定め。先陣ハ金鏃と大将とし。二陣ハ虎躬大将となて
金鼓と鳴し螺吹立てぞ攻上りける是より先小砦中小ハ楯亀山以下南議
して曰くふ。敵ふ勢なりとも大将虎躬とふく対取ぬ。其余の者ハ悉く逃散
ぬ。とも虎躬と如何して対取ぬと問小金道尤進く出て老と置若
年の異見如何ぞまでも我山中と見ふ一山の樹木大半枝葉焼失れども砦の
下三丁許小焼残し榎あて楯高く枝葉繁く身と隠ふ便よ。依て我
彼榎の梢小忍隠ると弓矢手挟て窺ん間白虫寄兵の模様と見合て伐く
出れと巧小虎躬と彼樹下へ鈴寄なぞ我其時梢し一矢前小虎躬と射て取

あん不知此議ハ如何有べきと言るれば。二座の面く金道九の身の怪たるハまつ
大いに感じて此謀臧ハ良策なりと同意し間者を遣して敵の動止を窺ハ
むるに其者立帰り敵軍明朝ハ攻上べき体ハいと報ず。是に依て金道九翌日未
明に件の榎の下に到り弓矢を負て大樹の幹をさゝ〳〵と猿の如く攀上り茂る
枝葉身を隠し。敵将遅〳〵と窺ひ待ど不敵なり。去程に大友方ハ那古
金鍬先陣となり味方に先立喊を発て山上へ押上るに諸木悉く枝葉焼亡く
木間あらハに見え透伏兵の有べき様なくなれば。勇み進んで砦近く攻上り。喊
を上く堀際まで寄番るに。砦より例の如く木石を投下し矢の雨を降しく
防ぐる故。金鍬も士卒を励まし稍久く攻るれども敵の防ぎ強く力疲て
引退れり。二陣の虎躬金鍬に代て透間もなく押寄門際まで破んとするに
砦より又木石を厳く投出しくるゆへ。寄兵堪ずして引退く時に白

虫百余人を率し門を颯と開き出て出引往敵を捲き立れば寄兵も踏留て
手戦ハ茲に先に大友家へ従人せし丹生樫根八今度同代に為に虎躬に連れ
て樫根もさる者に虎躬が勢の中に加り。金道九が白虫の首を得く高名を
顕し立身せんとの心掛なるべ。白虫が伐て出る気なるよう。須彼望む敵よを
うけ向ひ久らの早良殿丹生樫根を忘れず。唱天刀参れと呼ばり来る白虫
大に怒り恩を知ざる畜生我対に八足れど敵へ反忠せし不義の天罰を蒙
らせんと。太刀内ぬきて撃てかゝる。樫根得たりと同く太刀を抜き迎へ戦ふる五六合
さんざに争ふ白虫に敵し得ざれば次第に受太刀となりなれば。叶ぬとて身を翻し逃ん
とする白虫私ふて背より当と斬。太刀八業物なり鎧八薄し。忽ち二つに
成て亡ぶ。白虫八首を取られても反ぎ猶も敵に蒐向ひ大音に立名虎躬八ふたゝ
び白虫と三合戦ひ又よ。但し意を逃去しやと呼ばれば虎躬ハ憤怒

悪れ奴の廣言ふないで我手並を見てよ。馬と拍て近出珍しや白虫你
浪士の糧ふ尽へ山賊とかりて此山中ふ隠る夷主君の宝ふ達しふ石虎躬君の
命と承り。搦捉んとち向へう。你們ぐ多際ふく金烏公ふ拒敵せんとちる。彼青
衛ぐ東海を埋んち蟻蝼の泰山を崩んとちるふ比。及ざる軍とせんより。金道
丸と俱ふ降参せよ。我昔の好情と以く一命とや宥得さすぞ。〳〵飽すで欺き
辱しめる。白虫大ふ怒り。反答ふも及ざる馬上と歩立ながら蒐向ひ双方手垂
乃古兵なれど下くと切結。虎躬ハ白虫ぐ歩立なると慢り。只一歩ふせんと秘術を
尽くせども白虫も武辺の達者ふれど前ふ顕を後ふ出右ふ在ると見れど左ふ在
さ機変極りなく敵と縦と兼て計ア夷かれど一足退二足退く復の下
へ鈎寄んとしると。虎躬ハ白虫ぐ心術と知られて実ふ戦ひ徳く退ぐと思
ひ喰留〳〵切進。復の下へ鈎寄られふぞ金道丸ハ捎ふ隠ると弓矢番て待
ると。已ふ虎躬矢頃ふく来れど。神仏を祈して兵ど射る其矢過ず虎躬ぐ
内兜ふ鎧を付沓巻迫く射通しふ。夷の手あれど一声叫く馬ふ仰
さ反ふ落ると。白虫私ぐ〳〵地寄ふ終ふ首と掻ると。百余人の門勢一
同ふ喧と鬨を発り。勇ふ立ふ寄兵を捲り立ると。寄手ハ大将を失ふく
大ふ周障一支も支ど山を逃ふ木葉の散如く敗走しふ。那古金鍬ハ山
の半途ふ息と休み居ると味方の敗軍人ふれと敗走り。虎躬已ふ戦後一
ふと吉れど金鍬大ふ狭れ頼切ると虎躬討ふ。兵士卒の勇氣折け再び
此石と攻ると勝利有ふ。且敵陣ふて紆織の上重ふ此石と攻ると。憶病神ふ誘
れ俱ふ山下へ逃下ふ。伐残れ勢千騎余と将ふ。鈍ふ豊後へ敗走り。
此事ふ安く虎躬と討取ふ。勇ふ悦ぐふ者なく。其上寄兵機と屈ふく自
岡へ敗走りふぐ大ふ心ふ安人ふ。隆ふ酒宴と催て勝軍と祝ふ。主ふ賞金

金道寄手を
防ぎて遠矢小
賊将虎狩
を射る

戎子へ數日の軍労を休ませ給へ。城ハ此度の金道丸が狂捷とも引勢こゝに凡人の及ぶざる所なんぞ白虫息坂下未頼しく大将軍やうぞ感じ給ふ

避金烏出馬金道丸主従拔落

大友金烏ハ虎躬金鍬を芦城山へ差向られバ不日ハ砦を攻落し。金道丸白虫を擒ふして飯ゐ給ふと待ゝ給ふ。案の外ハ金鍬敗卒と將ゝ敗走り。芦城山の此石要害堅固ハゝ。敵防御ハ能し。虎躬了ハ戦死せりと告られバ金烏以の外ハ驚き。虎躬ハ死と悔と金鍬ハ不覚と叱詈り。此上我彼山へ押寄砦中の奴原を虎金ハ。虎躬が仇を復で止じと怒憤を火急ハ軍馬を徳集大野熊尾水原真崔比出逸雄藤根猿若と宗徒ゝて士卒一万余騎ハ定め專出馬の用意を急ぎ給ふ。垣の雅明ハ虎躬ハ戦死せと暗ハ悦び給ふ金烏ハ大軍を將ゝ芦城山へ向られとすると心中ハ患ひ此度ハ練言まるとも用

まじ死を知ゝ故意と練ぶ却ゝ出馬と勧ム。暗ハ密書と書て。例の腹心の者我使として芦城山へ遣ゝ給ふ。偖芦城山の砦ハ白虫太息坂下高綏の上大友家の動止を窺ハんと。間者と遣て探索ハ其者ハ早ゝ逃帰り金烏虎躬ハ戦死を憤り。自身一万余騎ハゝ押寄る由ハと報じられバ白虫太息ハ甚ぶ驚き。綏ハ評議區ゝなり給ふ。緒卒ハ金烏ハ向ふと安ゝ恐怖し。此砦要害堅固ハゝ橋亀山勇ましく。音ハ安ゝ金烏一万余騎の大軍ハゝ攻来ふ。ぶ皆時も持堪るの能ハぎんと耳絡合え来緒方の寄合勢あれば言甲斐なき者ハ枝くハ三人五人と漸ゝハ落行始三百余人の勢も纔ゝ百人斗ハぶ減じ給ふ。白虫坂下此体と見ゝ悶果。是ハ如何と歎ぎと高綏ハ嘆ぶ。黙然ゝていまぶ約を発する者なし。時ハ金道丸進と出金烏ハ我が爲ハ復ハ天と戴ぬ父母の仇なり渠自身向ふて幸あれ。味方ハ勢なりとも死と的ハ渠ぶ

旗本へ切入運を天に任せて有無存亡の勝負と決すれば何事か有んと思もぐ
言われた白虫頭を揮否く是甚だ短慮の即刻なり金烏八等閑の敵小
あらざる況二万騎の大軍を以て攻来ると百分一も足ざる小勢必死と極て向兵
印我以て磐石を竪ん危し金烏と対人事此度に限るべからず寛平白狐の託
言も金烏が命敷いまだ尽ざる短慮を慎む時節を待べしと云り斯すれば厚
く武威を怖るゝに似たれども愚案に倚て敵の寄ざる以前に當山と立退何国
か身を潜くべきか旧好の輩を招き集時節を待く対面すれば如何ともせん
演べるに亀山も甚とても白虫殿と同意なり天の時をも待ず無謀の戦ひを
好ば智の不足なり漢の高祖八七十余度戦ひ負ども猶気を屈せざる遂に烏江
乃軍に項羽を亡し四百年の基業を開しとこそ聞れば短慮を鎮め成功の時を
待べしと練られた木高連苑もとゞめに退去と勧る折も雅明が

密使来て密書と呈し給ふ白虫に急ぎ披見せるに金烏大軍にて攻向
間疾く其表を立退来鋭を避て重く亡を免る時節を待べきと書
て密使に与へ亀山及輸と書て密使に与へ労を謝して返
しめ偖塞中に残留る百余人の士卒を呼出し亀山言るは汝ら稚君の為に
一命を抛て敷度敵軍を伐悩し今度金烏大軍を率て向へ来る猶立
去ず稚君の御為に忠戦なんとする志返く神妙なり然ども寡に衆に敵
難れば稚君一旦當所を去重て時を待金烏を亡ぼん思食なれば汝ら
も當山を立退何国にか身を隠て忠義を忘れず稚君再び旗を上
ん時馳参て御味方に加はれと。若中に残る金銭を分ち与へ給ひ率
力を落し中に何国まで共従ひまゐらんと望む者も有れども太息制して
御身なれば大勢従ひ進せんと部署御為冥加ず稚君に我後五人隨従

吏足り。今ハ敵寄来む道ゝ路ハ多く疾く退去せよと急ぎ令ふ
ぞ。士卒们悪くうて去ハ忍ぶる色有れども。亀山強くせんとふ為方ふ
く。別を告ぐ皆隨意ふぞ落行ける。亀山今ハ心易と白虫夫婦水高連
荒ふと旅装を調。岩ふハ紙旗紙旌を多く建陳城門の外ふハ逆茂木ひしと
植門を固く鎖て猶植竜体ふとて有。兼く構設る抜道より金道尤
戎守護主従七人了ふ芦城山を落て中國筋へ赴れける。大友金烏バうう
吏と勢ふも寄ぞ。一万余騎と引卒霜月十日ふ白拝と発足筑前へ発向ける
路次より雪降出。漸くふ降頻りて芦城山の樵へ着ける須ハ平地雪深れ
吏三尺ふ余り積る。一万余騎の軍卒们寒く氣ふ冷凍雪路ふ行悩く病疲る
者多ける。金烏ハ是を恤む吏なく却て其柔弱多ると叱詈ける。士卒ふ
恨ぶやうざるふうう。借金烏山の景色と見るふハ真泉雪降積て路

も定ふふざる体なり。然ども安も屈せず大野熊尾比出逸雄両人ふ向ひ今雪
降積て馬脚ハ立ぶ難ども。士卒ふ雪を踏固させ你们両人一千騎を率て歩立
ふて攻上り操立よ。軍ハ不意を伐ふ利あり。敵ハ此大雪ふよる寄来るのあらじと
油断して防禦ふ怠り有。これを短兵急ふ攻結門堀を手破りて。雪ふ蟄奴頂を
撫斬ふせよと下知ける。両人ハ畏ると思ふの主命返さるる能ぶ領掌。山乃案
内を知る士卒を先ふ立一千騎を従へ其身も歩立ふて坂道を登るふ心ぐ之
険れ坂道ふ雪深く降積れハ士卒们大ふ行悩る。熊尾逸雄叱り励ま面
と敢ふ如れ雪風を凌れ幸て砦近く押寄。敵城を見上れ旗旌を立並
逆茂木厳く植く竜体なり。然ども静り切く人声なれ。例の緒よと前の軍
ふ手懲せ。士卒ハ有活ふ寄付ぶ。先貝鉦を鳴ま喊を揚と発る。其声ハ
狭れて谷ふ響ふ鳥もんど妻く組ける。熊尾怪ぶ。岩ふ敵推竜ふ

鵞烏捕ちて死ぬ。万一疾落去て空城あるんも知らず早く押寄門を打破
よと下知するぞ。士卒們恐く押上り。凍亀一手ぬ息吐けて逆茂木抜すと
門際へ攻結れども。猶砦中ハ寂寞として音もせず。熊尾逸雄見とりて
されバ社空城なりとて。士卒ぬ下知一門を打破せて入て見れば。案の
嵐の子一疋ぞ居ざりれバ大ぬ腹立て斯と思ひ。後手ぬ大いなる穴有るぞ。偖ハ此抜道より
と猶も砦中の隈々を見捜るぬ。
落失なり。再び足を留ざる中。砦を焼拂よと下知。所々ぬ火を掛させ焼立
諸卒と引き山を下り金烏ぬ斯と告れば。金烏案ぬ相違一。我疾より四方
ぬ隠勢と置て擒ぬせん吏安くる物と。手延して逃去せ一悔きよと牙
を噛み怒ども今更詮方なく。敵後落失て上ハ宿陣益なしと陣所を拂ひ
何の仕出一さる事もなく。大軍を引き空く自國へぞ凱陣しける

金烏改名 并 雅明祭新城勧奢移

大友金烏ハ白魚亀山們ぬ出抜を手代字て殿陣一れば。垣の雅明城外遠く出
迎て。本丸ぬ結び合戦の始末を問へる。金烏苦り切て有一次第を語りける。雅
明中ぬハ悦ぶべき左あるね体ぬて。渠們君の攻向ひ来と洩ず。神武ぬ耀怖れ早く
落失ぬる。全く君の御威光の強き故ぬてぞや。且逃隠れ所ぬ所在相知
いぬ一。其時擒ぬなるんず最安くいぬ一と言賺一れば。金烏然とて再び配
符を九列一四ぬぞ廻一々る。斯く其年も暮明て白鳳五年正月。白杵城ぬを
九列の國司郡司より改年を賀する使者市となり種々の聘物山の如く積上る
金烏ハ々る繁昌ぬも猶飽足ぞ。何乎九列二島を攻従都へ押上て當今を廃
一己王位を践んとの。限なく欲心弥増ぬ萌一。先改名せんとて或日垣の雅明を
召出一て曰々る。抑我先祖ハ武内宿祢ぬ庶子ぬ。木兎宿祢と称一其子を真

鳥の宿禰と号せり。此人武烈天皇の事て。勇猛絶倫にて勢威右に出る者なく
追々昇進して官大臣に任せれ。威名四海に震ひ世人平郡大臣と尊敬して公
卿大夫より庶民に至る迄恐ざるとの者なきと聞。今我武勇恐らくは彼平郡
大臣に減るまじく向所威に伏せざるはなし。因て我今より改名して大友真鳥と名
乗んと思ハ如何と。飽まで身を憍りて問られた。雅明ハ兼て金烏が身を亡さるべ
端を曳出さんと考られ。今渠が己と尊卑の僭上をうとて。能奢移の勧時を
得ては怡び起て拜賀し。真に芽出度御改名なり。鎮西ハ中に及ぶ東海北
陸南海に於も君の神武に及ぶ者なしハ。宣位の義ハ且さ〳〵也。智仁勇の三
徳に於ハ御先祖の真鳥公にも立勝りたまへ。それ只今迄の御名の金烏ハ日の
異名なり。旭の昇り傾午まぬハ其勢ひ強とりとも。昼より以後ハ漸く傾て斜陽
ふたんで弥其勢ひ微し。故に快からず。御改名有に於ハ某们も怡く

存ぜなり。但恨らくハ御城甚だ狭く且要害も利なきと。別に國内に於て要害の
地を御撰あり。御居城を廣く堅固に築て内に宮殿楼閣を営み建花蕚
乃壮厳百さく御在城なりとまうすべし。九列の輩信御威光の強盛恐れ伏従
いたてまつり。夫綾羅錦繡ハ威徳を示さの服なり。道徳なくして僧も綾乃衣
錦の袈裟を身に纏ハ他見尊げに見るが如し。然ども其住所相應せざれ
ば威を示さに足ず。故に秦に阿房宮の美あり。呉に姑蘇臺の栄あり。将に
御勝下に使令の側室女房達甚だ少くハ。使令婦女の足ざるハ一郡乃主
ぶも愧る所なり。況鎮西の棟梁たる君に於ては傳承る秦始皇ハ三千人
乃宮妃を具し會も玉に見ざる女官三十六人ハ〳〵〳〵。左程にて無之とも
美人を擇ぶ吏官を定め。御領内ハ勿論都鄙に分ち遣し。七色を兼し佳人
を抱しめ使令側室に充べし。最緒雑費に於ハ公用と号して九列二島

乃緒司へハ所領毎ゆ貢税の内十分ゞ一を上納さゞと觸渡され。御領下ゆて八年来名将の御膝下ゆ住く敵の襲来る患をまゝぐ。枕を巷山の安を小置商賈農民ゞ富栄るゝ他國ゆ十倍。安楽なる侭久限を忘れ家宅を飾り栄曜ゆ暮しゆへ。それ〳〵分ゆ應じて課役を命じ新城御造営の入用を究めゞ命じ啓を留して説勧それで強欲多婬の真鳥限なく悦び你が手延悪我意ゆ適り。我疾すり其心構あるゞゆ御即位慶賀の爲上洛せ〳〵砌新内裏の圖を你ゆ写させ収置りとそ把出し。你是ゆ准じて新城の裡面ゆ殿宇を営造せよ。但し新城を築ゞ地ハ我狩の時見定め置り湯の山領ゆて究竟の要害ゆ彼山を切開て築て建ゞと命じ内裏の地圖を渡し。それバ雅明仕ると。たりと胸中ゆ笑を含ゞ手ゆ押戴て懐中し。其日ハ私宅へ皈り。斯く真鳥ハ改名祝賀乃饗食宴を催し。

門縁体裁ゞの九列の緒士へも改名の義を披露し。其序ゆ朝廷の公用と号し〳〵十分一課役の吏を觸渡私領の商賈農民ゞ。新城造営の入用銭を集差出べと觸れバ衆人大ゆ困し果。先ハ狩倉の科とそ課役を取立。今又新城の入用金を責置ら〳〵無道さよと怨ゞ嗟ゆね者ハなゝ。雅明ハ直鳥ゞ下知ゆ仕せ。數千人の人歩を懸〳〵湯の山嶽を切開せ。又自國他國の山〳〵より良材を伐出し。砲弾の番匠都の瓦焼鑄物彫物の名工共招集め新城造立を急ぎ〳〵。其費賦幾万金とゆ數を尽べ。其年ハ普請ゆ暮翌白鳳六年三月上旬ゆ漸〳〵新城成就ゞ〳〵。城の廣さ南北三十六町東西三十町。本丸の内ゆハ宮室樓閣を造り立周りゆ十二乃門ゆ構へ彫物金具百工の手を尽させれで。其結構言語ゆ絶し。鳳の甍天ゆ翔り虹の没ゆ雲ゆ從耳へ樓閣巍〳〵と宇を連ね。壁の土ハ沈香白檀を交へ寛乃

帳ハ綾羅維綉と以て。唐木の高欄玉を磨き拱拼朱碧を輝し。所謂立夏一樓十歩ホ一閣と賦し久し。昊ホ過ぎと見えホ多。加之庭中ホハ清潤の八景西湖の十景と摸し。假山あり泉水あり。奇石珍岩列をなし香艸芳木名花佳樹具ぞと以て吏なく。五彩の唐鳥金鱗の美魚眼を悅ばすと以物なし。西天の伽凌頻中華の鸞鳳も備るべうぞ覚ゆる。斯て新城成就の義を眞鳥ホ言上しれば郎ち吉日良辰と撰び。臼杵の古城を出て湯の山嶽の新城へ移り。妻の辟女立女使令の女房と連宮殿樓閣と眺ぜし園中ホ逍遥して風景と翫ぶホ四季折くのあゆめと紋ら。先春ハ春草蕭々として楳櫻威を競ひ雨を愁る崖の山吹朱と嫉む汀の杜若百又と垣根の卯花乃。雪ホ皐月の闇を埋く。岩間ホ落る數條の瀑布ハ沼々として暑と忘るべく流ホ湛し池水ホ蓮川骨涼し用て。秋ハ竹離乃莉女郎

花桔梗刈萱咲交り。楓林の紅葉ハ錦と曝せるホ異ホ。ぞ花檀の下の白菊ハ如何ぞ咲せる霜と疑へ。冬ハ雪と望む三重の樓玉室の内ホ温泉を湛へられ。二月の風を献ずる菜園ハ有り。冬枯乃樹々ホハ五彩の綵を裁く花咲せ。人巧を尽く天ホ皆乃巧あり。れば弓戟刀ホ陳り。清香内ホ薫ず風ホ吟し月ホ嘯く。儲をなし多ハ唯是下界の喜見城人世の仙境と申紹つべし。偖又后町と号して丙舎と建續け。都吾妻と召抱へ美女佳人を住ましれば面々ホ粧ひを凝し。巧笑倩として百の媚と衒ひ。奎の眉鮑の歯頭ホ金の簪玉の櫛と飾り。髪ホハ蘭奢の香と芳せ。身ホハ扈流の織物花鳥の繡或ハ百般の深紺を服帯し。貴妃と欺て西施と靨と國色眼と奪ひ心と蕩す許ぞ。閑語苍と やいぞうん。人間の花街拼巷ハ乃ホハ天上の采花も見ホ勝ぢ。そ見ホる。眞鳥大ホ怡び雅明ぐ指揮の残る方なれを頻ホ誉賞

昔より當城に住して。錦繡の褥に坐し數百の美婦を集て酒燕遊奥に戯れ絲竹音樂に興じ或時は都鄙の歌人騷客を立ち或招寄て詩を賦し歌を詠ぜし。碁書畫の遊び不為ところもなく酒の池肉の林の中に憩ふ美婦の背を其名盤として肉盤と称し紅裙の袖を陳ぬさせて風を防ぎ夏を凌ぎ屏風と唱ふ彼池上の金蓮を步せて步蓮を生ずと戯れしも他所ちがひ覚えず雅明さま真鳥が側を去ど種々の驕奢を勧め。諂佞を專らに亡國の緒を引出さんと謀れば真鳥も其心術を考へ再難得者と奄遇するに大方ならぬ藩中の諸士雅明を見傚ひ我劣じと祝駝が佞を好まず。狹量隆に行れ已が身も弓馬鍛煉の義を忘奢移逸樂を常として金を礫のごとく捨鼎を鐺の如く拋く。鄙も惜む者と理なりと賤め放逸無慚の行条

譬ふ物かな。上る者は珎味淳酒に飽れども。下市人農民は日くに虐債ら且て。先祖重代の家宅田畠を貿物に入恩愛の妻子と遊君偶偶に賣渡しく終に其責を防ぎ昼夜思歎に袖を絞ぬ。嘻愚なるかな一天の君ぞ。驕奢に元は久しくすず況真鳥の輩に斯驕奢超過に及ぶと蒼天の冥罰を不知自滅を招くとて何ぞ。されば宋枯哀樂乃相追昨日の現今日の夢ぞ。維が常有と為を得人皆目前をの知て背後を視者稀なり。唯一且の勢ひを特で了に亢龍の悔有を為ぞ

真鳥が今乃栄耀は夏邯鄲一炊の夢に異ならずと不知者はかなし

妖僧道智弄幻術　并　真鳥掠百渝貢物

再給大友真鳥は雅明が蜜言に瞞されて早一天下を掌に握り如く思ひ國政を愚昧の家士に委せ其身は日夜姪酒に耽りて倉廩乃金銀用ひ

尽くして財用乏く成れば、人民を責て寄て高戸民家の金銀米穀を取債る
ほど庶人大に困窮し、怨を緋して銘く私財を隠し持て他領へ移る者多
く城下の騒動甚しく、真鳥斯と呼く大に怒り、国の出口毎に新関
を建て守りを厳くし、一人でも国を立去んとする者、盡く搦捕て三族に及
ぼされ也と高札を立れば農民工商他国へ移住す能ず、信嗟怨む。私
財を土中に埋隠て、針の席に坐する心地して頭を交へ額を合て苛政非道を
怨嗟る者のみなり。真鳥八猶も財宝を集んと、先達て十分一の課役を嘱渡
せし九列の諸司へ催促の檄文を廻しれば、真鳥が奢侵を学て其朝廷の
名を借て己が私用の財を集んとすると知隣国の輩も、催促に應ぜざる増
く遠国の人も猶去捨れて、真鳥又偽の檄書を作て当今より勅命下
て、に就火急に商議をべし一緩ある間、当国へ集會有べしと觸れども尚も

疑ひ恐て左右に託して来ざる。僅に佐伯連男、太宰和田九大串飯綱石橋
千足大伴渡丹毛栗生、栗生小魚坂下十人許を寄集る。真鳥諸司の
集る輩の心を慣さんとて、経方に先寄来し輩と客殿に請じ酒宴を
催して宮侍れば諸司も佳者淳酒に酔て、殿宇の荘厳庭中の
物好に眼を恰ず列位奥に入れば、斯て夜も更れば、真鳥諸客を
引て密室に入て近侍の男女を遠避て何事か有んと密談し、翌日
種々に饗應して其後皆辞して自国へ帰りて是逆謀の示談とは後
に思ひ知れり。然る処に忽ち太宰府より急使来り、百済国王忠元の
使者日本天子の御即位を賀しまんと貢物を船五艘に積て来泊すと報
じれば、真鳥心中大に悦び、今国財多く九列の諸司猶裸役の催促に應ず
ざるに、百済の使者来泊せば、是天の与る所なり。我太宰府へ到り百済

乃使者と為いて貢物を我所得ふせんと胸中に巧む。急に三百余人を率て
使者と倶に太宰府へ赴れ百済の使者を都府楼へ迎て對面して是
に依て百済王の使者李辟。石采。僧道智。の三人都府楼に入て真鳥に
謁し澤者と以て百済王忠元日本皇帝の宝位に即ぬと賀し奉り且き好
を通ぜんとて貢物を献る由を演れば。真鳥熊と慇懃に會釈。遠路の
海上を来朝せし疲労を謝し。大に酒宴を開て山海の珍味を調へ善を尽し
美を尽して饗應し給ふに使深く悦び盃の献酬とも
飲酌を楽み給ふ。中に僧道智は元勃海の産にて中華に入て緒宗乃
経綸を学ぶ上に又道術の妙を得れば。席上の興を添んと百般の奇
術を弄ぶ。先大なる水盤を出し満々と水を湛へ少時呪文を唱祈念し
給へば水中より忽然と荷葉生ず漸く伸長て葉を開て花を生じ
て潔く芳香馥郁として席中に芳ぐ。真鳥を先として一座の
輩感賞して止ず。道智又一枚の紙を出し刻て鯉魚の形となし。盤水
の中へ投入れると見る間もなく。蓮は消失て紙は頭を生じ魚と
変じ。金鱗の光鮮なる尾鰭を揮て水中に游ぶ内に漸く肥大なして盤中
に満る許に成れば道智手ずから一尾を掴出し厨人に命じて庖丁を
奚とし一座の面々に喫しむ。各箸を下して味ひ美なる事限なし
道智又鉢に盛る桃を三四枚投揚れば三四羽の雀と変じ啼囀
て須臾飛翔る。道智掌を鳴せば其音に連て悉く衣の袖中に飛入
る。頃て把出せば旧の桃なり。座中の輩奇也妙也と賞て驚
感ぜざる者なし。就中真鳥は深く賞美して道智に向ひ傳授を初手を
岩と擘て羊と。左慈は盤水に鱸を釣て之を。丝にも書籍の上に入る

のゝふく信ぐく思しふ。和僧の奇術と眼前ふて。彼初平左慈ぐ術り虚延ゐゝぐる残寛まりと言ゝるふ。道智完示と笑ひ。初平左慈の術を仙術ふく世ふ益有るのみ。唯一時の戯ゝ。我行ふ処ハ佛法不可思議の神通より出る妙術ふく。世ふ益有る無量なり。昔佛在世ふ舎衛國ゝ六道師ゝるゝ舎利弗と術を捕れども。道師勝る能ハど。是正法と邪法の差別ふく。喩で氷と水晶との如し。佛法正利の術ハ邪を退け悪を懲す方便ゝるれど一時遊戯の道術仙術と雲壤の差なり。同日ふ編ど屋ゝずと言ゝれど。真鳥愈感じ。和僧ゝ我國ふ停りのゝ。大迦羅を建立て任世め。九列の人民を擅越とを感じと言ゝるふど。道智大ふ歓び拝謝。拙僧実を倭國ふ住し。一宗と開く衆生を化度せるゝ。今度二将軍ゝ日本へ使去ゝと幸ふ同船を願ひ。不斗君の如き大檀那ふ遭ゝ滅ふ

佛祖世尊の御手の糸ふ引合せゝるなるべ。と喜色面ふ表をゝる。原此道智強欲不頼の悪僧ふて。唐山ふても數度國法を破りて百済國へ追放を。百済ふくも破戒無慚の悪行多ゝるゝ故緒人ふ忌悪され。彼土ふも住居去ぐく今度両使の船ふ便乗をゝ倭國へ渡海し。初く真鳥ふ對面しゝるふ同氣相求の理ふく。真鳥も渠ぐ面貌一曲者と見て。ぐい自然の時の荷擔人ふせんとふ巧ゝて斯勧めるなり。斯く真鳥指揮して酒宴を盛ふ。大盞を以て李辟石栄ふ多く酒を強勧ゝれば両使とも大ふ酩酊して席上ふ酔伏れ其余随従し下官们も此所彼所ふ酔殺ゝる。真鳥ハ倍従の者て皆退しあ妖僧道智と奸計を示し合し。深夜ふ李辟石栄ふ酔卧るゝと刺殺し其余の者とも悉く屠殺して。急ふ三百人の士卒ふ下知を傳へ五艘の船ふ乗し百済國の者们を残さと切害させ。數多の貨物と掠取て五艘の船と焼拂ひ多

乃屍を海中に沈め。世上へを一百濟國より我朝の天子の御即位を慶賀さるゝと
詐て五艘の船に軍勢を隠し押渡る。僧道智我に告知せ有。二今賊將を
先〳〵東勢を残ぢ討取。兵器火炮の類船と倶に焼捨ると言觸し。イに道
智と伴ひ士卒を従へて。本國湯の嶽の城へ皈り。偽の表を作て百濟の賊軍を
慶金に かゝるよ羨し。不義乃貨財を奪取る。例を以國賊なり。

春衡創輕寺天皇御幸 并金道光助責罰

再結佐宰相春衡八壬辰乃合戦に天皇の御味方し。屢勲功を顯し。乱
治て河列の内三群を賜り。武臣となりて高安の城に居住し。大分恵尺の女を娶
昔の憂苦も今は歓楽の秋と成る。深く君恩の忝を感佩せるに付ても又
輕大臣兵に母の死を悼む。父母追福の爲大和國十市の郡に於て一宇の梵刹を
建立せるに〳〵朝廷へ願ひ出る。素り天皇は佛法を深く尊信しまへ。春衡

乃願のまゝに神妙なりと勅許なりまへ。砂金一萬盃下し賜り。春衡に
歓び厚く天恩を謝しける。工匠を召て一寺を建立せる。今年白鳳六年
六月上旬普請成就せる。輕寺と号し僧行基時に年五を道師として
入佛供養を執行ひ。抑此行基は泉州列大鳥郡の産なり。父は高志何某
百濟國王の落胤なり。其母妊娠して月満産帶を解く。生出る時胞衣に
蘊まれて鞠の如くなりければ父是を見て怪異に思ひ里外の樹下に棄置く。
流石恩愛の絆に引れて翌日又往て見れば其子胞衣を出て樹下に在。又慶
ひて懐抱り母の乳に付て養ふ。三日を経て能言語ふ。又母奇異に思て養育す
る。幼稚の時より異相あり。四五才の頃より石を積で佛塔の形を造り。土を
塊て佛像の躰を造り。是を礼拝して遊戯とす。十五才に成て終に出家し
藥師寺に入て新羅の僧慧基を師として経論を学ぶ。一度讀て能暗記し其理

小不通ることなく。了小瑜伽唯識を学び究め博識の中の久高し。其性慈善
殘好く往路小川あれば橋を掛け水除小堤を築き水便あり。田畑小溝池
小を堀く耕作の助となる。緒人其道徳を尊むべかり。されば春
衛も行基と云く導師となるなり。帝も兼て行基の徳を睿聞し
めさで。此日孕なくも皇后及び緒皇子と倶小鳳輦と環され〳〵旺寺へ
御幸ありて名を春衛深く招び仮殿を設け敬び請ずなり。斯く
行基八衆の僧と法の式を整へ入佛供養の大曼陀羅會とぞ修し
僧侶法衣の袖を陳ね林八目八伽陀散華續涇の声最殊勝小く即身
成佛の恵只阿字本不生の空立小耀く煩悩妄想の雲霧八即是毘盧
乃風小拂ふ。上永菩提の幢幡八下化衆生の前小閃く。金胎不二の焼香
八魔佛一如の場小薫じ。六方の聖衆も茲小来迎し。旺大臣夫婦乃霊を

極楽浄土へ引接まゐらせんと。天皇皇后を首とする。群参の貴賤渇仰
し感涙小紋を沾しけり。斯く入佛供養常なく済れば帝八皇后緒皇子
を従へて還御させ給ひけるが。日まだ未過る頃小。其日八殊さら小炎暑
強かりければ飛鳥川辺小納涼の御遊させ給ひて鳳輦を飛鳥川の辺
促しめし兼て建さる行宮小玉座を備緒皇子緒臣を近付給ひて涼風
を賞し御酒宴を催しめしけり且絹大伴金道九八亀山爻子白虫以下
と倶小芦城山の岩を落く和列石上へ赴く。叔父吹負小對面し復仇の助
力を頼んと。亀山太息と云く案内を名れば吹負早速呼入く叔姪対く
對面し舎弟馬来田面容似く。並起居寛静小して機面小表れる所
く斜ふ〳〵と悦び。亀山爻子の無異を祝し白虫夫妻木高連苑ホの忠義を
賞して。金道九と初對面の盃を交し。復仇の期来るまでハ我方小有て時節

待べしと底意なく言ふるふより。金道丸主従大いに悦び厚く恩と謝し。其よ
と吹員ぶ紙ふ任しくる。扨るふ金道丸怪寺の入佛供養の由とゆ乞父母の追
福の為叅詣せんと連蒐一人を將さ怪寺へ詣ゆる。帝も御幸在れば今を
日蔭の身ぶ心ふ恭ひ遥ふ下坐してよそぶら拜礼し。偖群集ふ雜り供艱
と拜見しくるふ佛事も終り帝の還御在すと拜し。金道丸ハ西國ふ育て雲上
人を見し支も有ざれど。珍く思ひ供奉の人の後ふ付き従ひ往られば。飛鳥
川の行宮ふ入御なりしひるれ御遊の体も拜見せゆるし。世と忍び身あれど
主従とも編笠ふ面を隠し。此所彼所徘徊り。太宮人の逍遥ふ之を眺免
居ゆる。柳些祇鳥川を。南方ハ山中く新緑蔭涼しく。ハ清流浅く。汀乃砂
白く濃ふ東岸西崖の奇石怪岩ハ態と造なせる如く離る有重ゆる有
てゆる月面白く。浅瀬ふを鮎さぶ。深淵ふハ鯉魚し潜る。川原より吹
送る風の涼しさハ三伏の暑を忘る。秋と思へ許あれど。人々奥ふ進び
中ふ草壁王の公達十名許ふなりしを。近習の徒小船ふ乗進せく
浅瀬を漕正さ。此。馴ぬ水棹をとるふ面白さに主臣笑樂し余念
成忘を漕往るふ過く岩ふ漕當船岩破と注く公達忽ふ川へ没ど
のひれが。近習们大ふ驚と曳上進せんとする間。早瀬の水ふ流れ水底
ふれぬ例へ流行ふ。水術ふ長ね近習们あれよとと許ふ。維れ入で
助けまゐんとする者なし。金道丸ハ汀の岩根ふ休ひく見物して在るゆる。見と
ゆるより編笠ふ捨袴を脱間もなく其侭川へ躍入さしの深淵を無
なく立泳し。早く公達を助く抱れ進せ安くと淵を渡て汀へ上りれば
船ふ乗ゆる近習们大ふ悦び。皆汀ふ上りく。先若君ふ水を吐せ進せ。と用
ひまぐして成抱しまり。偖金道丸ふ手と下。你ハ何なる人ハ知れど。折よく此

あをうかの
荒き川のおび拵
びふ倉ろくけす後
こぶ
ろくろのえもろ紙
すく
越ふ

所ふ在合せ。若君を助進てせ〜吏の嬉〜さよ。と〜若君溺死去のひなぐ
我後もくもふ涙ふ沈ミ殉死せどんぐ叶ぐと。然ふ你ぐ働たふ依て。若君と
先〜〜我徒數人も命と捐のう。此恩何をいろ報ぐべぎ。そも你ハ何國の人
ふく姓名ハ何と名乗やと問るふ。金道九ゆも繕る色なく小子ハ賤〜ん者
乃男ふてハ〜む。名と名告いも嗚呼ぐすーくい今日恐とも省ぐ天皇の御遊
我拜見せ名ろ〜く。忍ぐ此川辺ふ来りひ〜ふ不斗貴冒水ふ溺のるゆ〜ゆく
偎ふ思ふ〜すし〜と悍多れ必ど御沙汰ぐいふと言捨て立去と〜
くるゆ。一人の若侍曳留。穩便ゆるやまれ条ふれども万一此吏後日ふ君の上聞
ふ達〜若君の御命と助ま〜〜者の名所も問紀ぎず〜置〜と。不念
乃御咎と蒙りふぐ陳謝の刻なり。是非とも名所を明〜ハて止ざれぐ
金道九絵方ちく。左様ふ後日の御難義といへぐ告進を硬〜。実ハ伴吹

肩ぐ小者満石と呼ま者ふくいと名乗別と告く連苑と従ハ足早ふ立
去石上へぐ飯リくる。天皇八日の傾くゆぐ御遊在てアふ皇后緒皇子と
くもふ清見原の宮へ還幸なくせのひくり

金道九元服改名 并 栗隈媒真鳥

草壁王命へ飯くせ。ひく後若君乳ふ秋鳥川ふく水雞ふ逢〜吏を語
ゆひ〜ゆ。何〜ゆ文君の御耳ふ入大ふ敬焉のひく。其時徒従せ〜近習们を
召と吏の始末と問紀〜ゆふ依。近習们隠たる能ぐと有の侭ふ言上〜
くれぐ草壁王近習们ぐ過を叱トせのひ無ぐ其時九ふ子細を告其ハ者
と連来〜ぐる。九ぐ兒の一命と救ひと其侭さ置ぐ名ふ〜ぐ急ぐ吹員
及び彼助〜者召寄よと仰くふぐ近習们恐入即時ふ石上へ使者を
立吹員金道九両人をぐ招ぐくる。吹員ハ件の吏と知ざれバ何吏ぐと紛

ふぐり宮の御名黙止ぐく金道丸を捋く宮の御舘へ行候〜斯と通じ乞む。即刻御前ふ召出され草壁王御對面有て仰々ろハ先日飛鳥川御幸の折ろ〜丸が若過く船より没ど。溺へ流まこ己ふ溺死さべるゃ〜と你ぐふ者満石ふ〜ん其場ふ居合〜溺へ飛入く助〜由漸く丸昨日是と守や疾ふも礼謝ふ及ぬ乞を。近習们丸ふ告る吏遅れふ侍今日まで其沙汰ふ及ぬざし満石と八其者なりやと仰れど。吹屑宮の御意と兼ゞ。始く貴冑乃危ろ〜を知。金道丸ぐ飯宅の後も其吏を絡ゞ。功ふ残ざる我心中ふ感ど ふぐり。御前ふ向ひ。某八曽て貴冑のさる御危難ふ逢ひ〜を知ぬ ども。此者折よく其場ふ居く救ひすゞ〜八貴冑の御運芽出度所ふて敢く此者の功ふハ代ど。但〜此者義八鍼八某ぐ姪ふて。父八豊後國臼杵乃城主大伴馬来田ぐ孤ふく。実名八金道丸と呼ふ某ぐ紆ふ身を忍ひい紆々

如斯〜ふく〜ふく〜と。金烏ぐ奸紆ふく馬来田を害〜家督を奪〜條を看と く金道丸ぐ艱難亀山白虫以下の苦忠を一五一十委く言上〜ゞれ。草壁王聞食度ふ敬駕歎ゞ〜。金道丸ぐ薄命を憐く金烏ぐ奸悪を悪ゞ仰ぐゞ八思き〜大友金烏親兄を害〜其家國を奪ふ無道の者ゞ〜んとハた渠大友皇子ふ一味せ〜由ハ先達て其ぜゞえ有ゞれども。壬辰の兵乱ふ皇子の加勢せざゞ乞ゞ。朝廷より罪科の御沙汰ゞく。其代ふく〜賞の多り。強ども今ゞ你ぐ物語ふく八例希なる無道者なり。渠ぐく〜置ゞを王政の瑕瑾なり。筑後國阿蘇栗隈八丸ぐ方ふ要る者の縁体ゞあれど。暗ふ渠ふ命く金烏ぐ罪の実否を探〜せ。弥舎兄と紆〜家督を簒奪せ〜ふ決せむ。今上ふ奏問〜。金道丸ぐ復仇の本意を達せ〜む。先〜若ぐ一命と助け〜礼謝の為ふ丸金道丸ぐ烏帽子親となり。元服させ改名せ〜む

ゐ〜とて厚くて御前ゐく元服の礼式を行ハ〜めゐ。烏帽子素袍時服ゐと賜り。先祖武内宿祢ゐ名を執ゐ。大伴宿祢金道と名乗ゐて即御土器と賜ゐれ。吹屑金道大ゐ歓び三拝して厚く鴻恩を謝し奉り。御暇を願ひ叔姪とも悦び勇ゐ石上ゐ飯りゐる。絨ゐ孫徳あれバ陽報有と八是ゐの〜ゐ絨ゐ有る所〜。其後草壁王八暗ゐ書信と阿蘇栗隈ゐ方へ遣ハれ時〜ゐ金烏ゐ罪科と探知を受て昔御内命有るゐより。栗隈ゐ我女と草壁王の御所へ奉公ゐさ〜せゐ君の御目ゐ留ル幸と蒙りまゐる。草壁王と主君のごく尊ゐられ。今此御内命と承りて畏りまゐり。素〜ゐ〜門ゐ〜ゐ〜ゐ〜直烏ゐ無道驕奢と思ひ甚〜く歎折ゐ〜ゐ渠ゐ罪科と見露〜朝廷へ訴へんと思ひ夷多年ゐ有ゐ草壁王の御頼有ゐ付愈思慮と廻〜る。後ゐ此頃直烏ゐ専ら美女と求る由と聞て是

究竟ゐ夷なりと。我家士の女ゐ絶世の美婦あり。強も才智勝と勇気男子ゐ劣ゐれ女の父と招ひ密意と言ゐせゐるゐ其者主命と領掌し女ゐ無く直烏ゐ館へ奉公ゐ任込せゐるゐ。直烏八女の胸中ゐ一物有とも知ず其美色と悦び〜壁女妾と〜藤井と呼て寵遇ゐる夷大方ゐ〜〜

道智修法真烏殺愛妾

却結大伴真烏八百済國の使者と殺し。ゐの貢物と掠取て不義の利と得倍驕奢増長せ〜バ。垣の雅明晴ゐ悦び真烏己ゐ奢侈を事として國賊ゐ〜〜。下民怨背く上百済國の貢物と盗掠ゐ大罪と犯し。れバ滅せんゐ遠ゐ〜ゐ猶も其奢と起過させ自滅と急ぐゐんゐのと。一日夷の厚真烏ゐ勧ゐ君の御威勢年と追く懲ゐ九列八ゐ及ゐ。四國中國の諸

司も君の下風ふく人衆を顧いよ〳〵彼徒卿館へ参候仕る節ハ君の厳威を示しめ給ふ。其肝膽を拉ぎ死の不如。今ハ城壘殿宇ハおきく王候おも劣すぐれいへども。まぐ使令の女房達の位定〳〵ど〳〵何を上座何と下座とも知ぐ〳〵。何卒君の御意ふ殊更合〳〵女房達と皆典侍内侍と官名と呼衣服も朝家の官服を著させ。平日ふ御側ふ侍〳〵せく給仕させのいふバ益々〳〵いりんとやなれど。真鳥大ふ怡び仰ゲ中処能我意ふ適りしと。己ゲとり分寵愛する嬖妾八人を典侍内侍と僭号〳〵綾綸子の白無垢縅袴残著させて左右ふ置くる。其女房ふハ大友皇子より賜り〳〵櫻の局と第一として櫻の典侍と呼其次ハ梅枝の内侍。第三松の典侍。第四藤井の内侍第五柳の典侍第六呉竹の内侍第七桃園の典侍第八白菊の内侍。以上八人と数百人の女房の中ふても殊更ふ容色勝と真鳥ゲ最愛とする所あり。是ふ准じて其身も帝王ふ比ぶ冠と頂ち羅綾の衣服と湿ひて錦繡の裳ふ起卧。八人の典侍内侍ふ傳せ〳〵ハ禁紂の驕奢ふ勝と彼項羽と狙猴ふ冠せ〳〵と謗ぐ〳〵例も真鳥ゲ身ふ思合され。唯是盧生ゲ夢の王位と一般さう。されど真鳥を心愈驕り。政道ハ奸曲の家士ふ任せ。裁判の善悪を撿めず紀をとるもあれど。藩中の孤締市中民家の公事沙汰も混乱善悪理非の差別なく阿り綾へ功ゲ紀者も加増せられ。練め争ふ者ハ越度ちゲふ禄を削られるゲ。家士ゲ皆私欲と麦〳〵。暮夜の金を納紬下の苞苴と抓も清廉の士と思ひ多年勤功の士も新の過を科あく死刑ふ行ひ残忍刺薄横行非道の刑罰止時なれバ実ふ民手ロ人と措ふ所ち〳〵拉ふ希有の珍麦出来〳〵。其故ハ真鳥ゲ引房の傍ふ。隠謀密綾乃一室と構へ密麦と然ざる者の外ハ出入を絆さど。側近く召使ふ女房とゝも八人

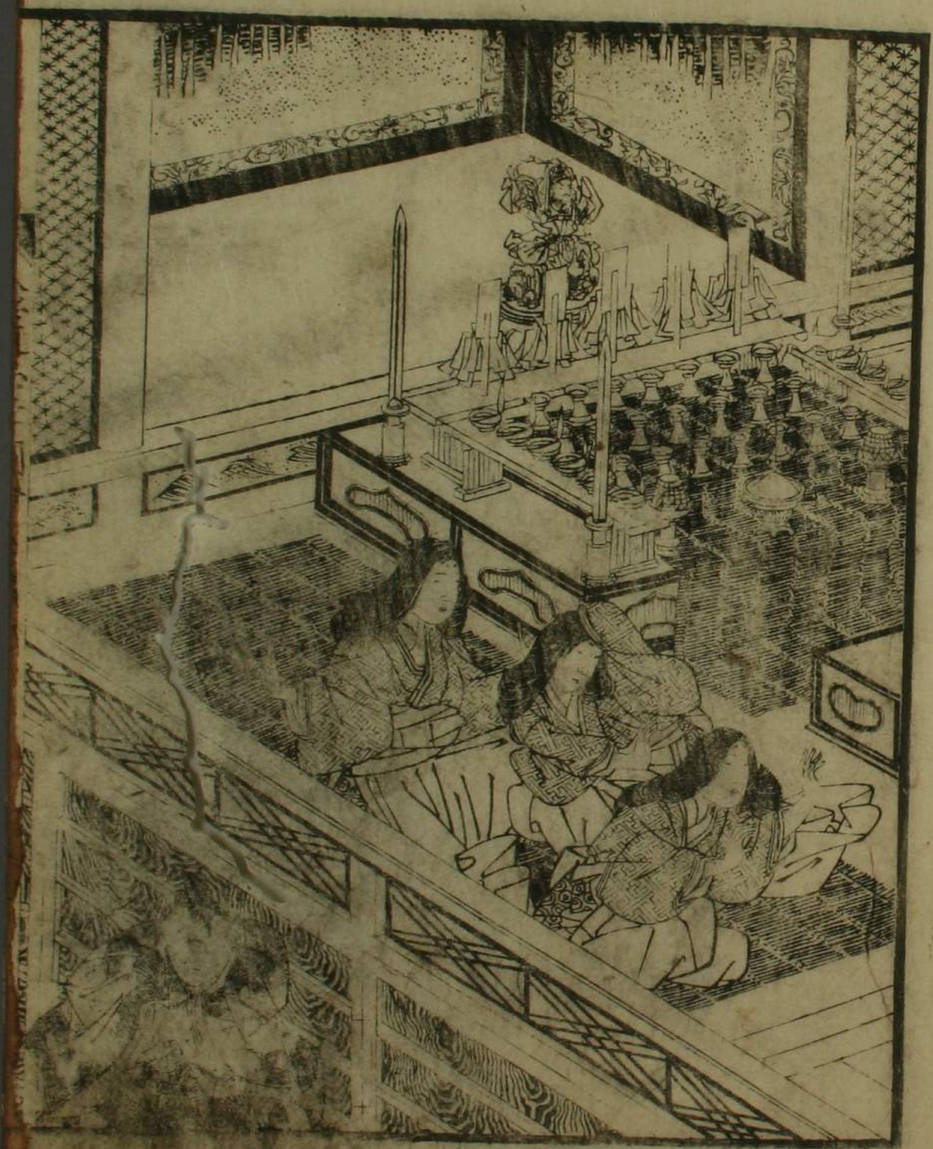
の壁妻の外ハ一度も内面と見ル者もなく。密談あるとき時ハ堅く鎖しくる。此密室の床柱の背ニ穴と穿ち、隠匿味の連判状又ハ荷擔の者より差越さる書翰ハ皆ここに納く。件の穴の裡へ穏し置れ。出入せる者も是ハ知らず。一日佐伯連雄より密書とさし越々る。真鳥右の密室ニ入く佐伯ゞ書信を披見し。其書信を例のごとく床柱の背なる筥を把出し納置んと捜ルニ。是ハ如何其筥無し。真鳥怪と猶執捜見れども曾て無り々るゆゑ愈疑惑し急ニ八人の典侍内侍を密室へ招集め。一人〳〵厳しく尋問れども皆露知ざる由答るゆゑ。真鳥も迚方なし。雅明と百浄の妖僧道智を招て密書の筥紛失せし義を告此吏如何をゞ礼と議るゆゑ雅明眉をひそめ此室へ余人を入するゆゑハ八人の典侍達の外穿殿鑒を破者なし。道智大徳の法術を以て盗〳〵取し本人を見顕ハさと方便ハなくいやと向ニ道智答て曰此義さして知難ゆゑあるまじ。拙僧ゞ法力を以て其本人を衍顕さんと掌を指ゞ如し。但し祈念をなる小ハ方二間の清浄の檀を此室の内ニ儲上段に孔雀明王の尊像を祭り。地水火風空五本の幣帛を百虫の香油にて獣類鳥類虫類を百品集て其生血を絞取て供し。其他百味の供物を具十二の燈明ニハ蝦蟇乃膏を用ル四方ニ新身の剣を立中央ニ一束の藁の形代を置檀の四方ニハ人の女房達ニ各髪を洗ハせ浄衣を着て居並り。拙僧秘密の行力を以て祈る者ゆゑ。形代の藁人偶已と歩て其盗隠せし者の前へ来り到り抱者ゝの奇妙なり。是道家の大秘法ニて未ゞ倭國ニ知者あるゞ〳〵と。最縛顔ニ言るゆゑ。真鳥大ニ感伏し。雅明ニ命じて我ニ室の中央ニ二間四面の檀を設て生血を絞せゆゑ

其外祈の具を取綱へ八人の典侍内侍小袿浴衣を新に裁縫する白衣を著て檀の八方に坐せり女僧道智は柿渋の衣に高珠數携て意氣揚々と檀上へ登り真鳥一人太刀を佩て御八上に坐せり其余八人も室中へ入ぎ固く鎖し。偖檀上を入渡せば正北子の方に櫻の典侍長々る黒髪を洗し伏て根本を錦に結び末は長く背に垂態と紅彩を施さぬど雪を欺く素肌に白綾の小袖を著し。紺の長袴を著新麻八上に坐し艮の隅に藤井内侍正東卯の方に梅枝内侍巽隅に松の典侍正南午の方に柳の典侍坤の隅に呉竹内侍正西酉の方に桃園典侍乾の隅に白菊の内侍各次第衣服櫻の典侍と一般に紅彩の色を借れども天の力なる玉貌花の如く。照君飛燕とも面を掩て恥べぐ又ゑに成る。時に道智法師は銅鉢を鳴し。獲ノ香を新に烈くと焼き

経文高声に誦し數珠さらくと揉ゑ黒汗を流して祈る度半時余り に及ばれば行力の業にや有ん五彩の幣串風に鳴騒ぐ。十二の血燈悉く大に赤き光を身の毛も竪許物凄く折ゝあれ檀の中央に立ち葉形代ゆる〳〵と動揺出し〳〵る中に八人の女房是を見て皆顔色如葉戦慄て真鳥は須波やと瞬もせず息を詰てぞ守り居る道智も信丹誠を凝し。真言呪文を唱ゑ珠數を揉切祈に責り祈り立れば形代は生るが如く歩出し艮の方なる藤井内侍に向ひ歩寄んと せしに又後退して中央へ立ち道智心焦〳〵猶高声に祈れば形代は動ぬ出ぬ〳〵藤井内侍は方へ向ひ〳〵ぐ真鳥は弥眼を放さずして腰に成て守り居るに形代は藤井内侍の方へ歩〳〵寄ぐ〳〵ゑ〳〵る忽ち北方へ向横さまに立て櫻の典侍が膝へ仆り抱付き見を

〻〻真鳥想道偖ハ密書を盗ハ櫻の典侍ハ極りさう。渠ハ大友皇子
ハ乞受我妻年不便と加ハ。密書を奪ハ隠せハ壬辰の合戦ハ我皇子
の催促ハ應ぜざるを渠女遺恨ハ狭我企を朝廷ハ許人せん為なり
と疑ひ檀上へ躍上り櫻の典侍が緑の黒髪を岸破と掴そ手ハ〻〻捲
宙ハ提て檀と飛下席上ハ捻伏眼を瞋ー大声ハ。你妻年の我恩恵を省ず
大友皇子の伜ハ〻ハ。密書を盗ハ紅人を巧む条不敵ハり。今佛天の冥覧
道智ハ法力ハ〻露顕せ〻ハ。よも陳ずる対有まじ。密書の筵ハ何方へ隠
せ〻。明白ハ白状せよと。摺付て責問ハれ櫻の典侍ハ素リ露身も身ハ
覚ハれず。苦痛の下ハ涙の声を発ー是ハ年来の御寵愛ハ引〻ハ情ハ
仰ハる。偖老と契り進せ〻君の御大事と爭ハ人ハ洩ー〻ハ〻ハ増てやその
密書とやハん盗〻隠をハんとの空恐ハ〻ハ業となー侍るべハ願ハハ御疑と

晴させ〻と息の下ハ入〻声も絶〻ハ謝ハれども真鳥ハ已ハ疑心暗
鬼を生ー一図ハ皇子の怨を復ん為ハ密書を盗と思結ハれハ猶も罵リ
你薄ハ辰を翻ー我を欺んとするとも何ぞ恕をべハ妻年の恩を捨
冠せんとせー天罰を思ひ知せんぞと左手ハ髪を掴ぐ提げ右手ハ太刀
を抜リと抜鳩尾へ突と刺通ー一ハ〻ハ〻ハ〻ハ櫻の典侍ハ苦
と叫び。虚空を抓を脚を縮め。鮮血滝のごハ白妙の衣も紅井ハ変ー眼と
鉤上歯を咬ハ断末魔の形相凄ハ。腦ハ落魂消ハ残る七人
の女房ハ倩ハ〻ハ。更ハ生ハ心地ハ〻ハ。噫不ハ〻ハ昨夜
櫻ハ翠帳紅閨ハ枕を並ハ北面ハ契を誓ー最急ハ妻ハ如何ハ
罪有とも。昔時の猶豫ハ有ハ〻ハ。一應の糺明ハも及ハ忽ち殺害ハ及ハ
残暴とも無道とも。言ハ〻ハ卒動ハり。真鳥ハ典侍ハ息断絶と〻ハ



啓書の紛
失ふよりも
美男梅の
典侍を殺
害せ
まとろ

死骸を傍に投捨猶怒氣鎮らず。両眼を瞋して七人の女房に向ひ。如何や
汝們此女八大友皇子に乞得て我最愛の人を。竊盗とあるべきと以
て今之所に手紙をせり。愛に溺るゝ色に引まざる我八至剛勇猛と見よ
汝們とても以後不貞不義の罪を犯さん此女と必ず例とせんと罵りたれば
七女八只首の上より雷霆の落るる思ひをなし。さるの道智も真鳥ぞ短
慮殺伐残忍怖る。茲に垣の雅明八道智が行法如何あらんと室外へ来り
窺ひ聞ふ。真鳥が罵る声を聞く急ぎ戸を開き入れば。櫻の典侍を
朱に成て死し。真鳥八勃然怒に面色火の如く見えれば心強き道智に
支の襲まと手を掛ん。真鳥に向ひて言と正し。道智大徳の行かして本人
相知御手紙有り上る。七人の女房達と少時休息せんと某一言申べき
義のいと言ふるに。真鳥少し怒と和げて七女と退うも雅明に向ひ

道智が法力に櫻の典侍本人に極りたれども。渠尚争ひて白状せざるが手紙
なるべし此上の経緯八如何と問ふ雅明答て君八御性貨勇氣に逸り
あるが故御短慮の御挙動多くい已に櫻の典侍本人に極りぬ慮も再慮
も結局有て。密書の隠し所を糺すべき早く御手紙有て穿鑿乃
種を失ひあるべきと斯程の大事を巧む妻。婦人の心に任て有べき義に
いはず。必定頼し者又八荷擔の者もいまし。常に八人の女房達の外に此密室へ
出入する者いまし。七人の女房達の中に櫻の典侍と意を合せし人無とも定め
難し。されば七人の女房達を禁固なし心長く問糺すべし且又興安の典侍の丙舎
の手洞度器物を検めて使の卑女をも糺明すべしと勧るに道智真鳥始
て短慮を後悔し。急に七人の典侍内侍を丙舎に禁固厳しく監視を付置
と下知し。櫻の典侍の卑女を捉へて丙舎中の洞度器物を検させられども更に

怪しと思ひ品もあらざり。然るに丙舎頭の者遽しく真鳥が前へ走り来り先刻より藤井内侍丙舎に居るべき車を問ふ不知と申し入れ人歩を分所々を捜し尋ねども曾て影形も見えざりとぞ訟る。真鳥大いに紛れ。藤井内侍俄に隠せし吏最不審あれ祈の檀に形代両度まで藤井が方へ向ひたれども了ぬ櫻の典侍に抱付しと云ひ櫻を本人と思ひ手討ぬまつれども。今能思惟すれば形代の二度藤井が方へ向ひしは本人櫻を盗取りし藤井なりとの知せなりなる者と夫と思よりて手延ばしせるとの我一期の不覚あるとも女の足に遠く落延得じ。方へ手配して追捕せよと燥て下知を傳れば承ると数百人を國の出口へ走せ艸を分て尋捜せられる。更に行衛知れざるれば紛方なく真鳥に斯と言上しくるれば。疾く檀に捉ざりしを悔ども其甲斐なく。残る六人の女房を百般に結問されども皆露まるざる由を明らかにひ。外に證拠となるべき品もあるべきなれば。真鳥大いに心を苦しめ只管藤井が在所をぞ尋捜させける

藤井奪密書逐電 并 栗隈密上洛

真鳥が壁妻藤井内侍といふは前に如し阿蘇栗隈が家士岩根直と呼者の女にて國色有上に智勇を兼ねし栗隈の密計を受て真鳥が側室となり。媚を衒い言巧みして其心を蕩し。ついに八人の壁妻の中に加られて暗に密書の筴を奪取て栗隈が間者に給貫とりて湯の山獄の城中へ入込る者に。人まれぞ渡しと。栗隈へ届しに。今は此城中に在て益なし。透間あらば遁れ出んとのみ思へ所に密書紛失の吏露顕し。真鳥が指揮にて道智が祈の檀へ上りくるに。密書は連判署に已に栗隈が間者に渡しぬれば吏露顕して刑に行はるべきとも。忠義の為に棄る命更に惜むに不足と。雄しく

心を定め億する氣色なく擅上に坐して在るに道智が祈に從ひ彼藁人形動出して藤井の方へ向ひ久れば藤井も胸裏に今は免れ場所と覚期し。若近付ば一刀に形代を刺貫き直に吾身も自害せんと暗に袖中にて七首に手をかけ寄ば拔合と形代を引結て待居るに如何あるか或は後退して回の中央へ飯りぬ。又祈ありて再び藤井が方へ向ひて歩寄んとせと。今は絶体絶命なりと愈氣を励し。已に七首を拔んとすれば形代を其勇氣に怕れん。藤井が前に近付得ず。却て北に坐しる櫻の典侍の方まで往ぬれば真鳥櫻の典侍を本人なりと思ひて切害し藤井は不測に虎口を免れ丙金に入ると比べ浄所へ往と早女を賺し。兼て通れ出ぬる路は見あれつ。廊下の下と潜り園中と拔通りて。水門より城を遁れ出て夜を侵して筑後と望て落行しは夫も及ばざる挙動なりと見て以前に彼絹貫に成りて間者に藤井より密書の送を受取直に筑後の栗隈の館へ馳帰て件の筥を呈し藤井が働を絶り久れば栗隈管を閉て連判署密書を披見して大に怡び深く藤井が功労を感じ又歎息して可憐彼女此一義露顕せざ。真鳥が毒手に切害せられん惜べくして。屢悼て悔る事三日過て岩根豆女藤井と將て栗隈が面前へ出ぬ。栗隈手を鼓て再生の人に逢ぬと。大に悦て藤井を近く招て珍しや你我が命令を重んじ身命を抛て敵國に入て我狼に比べ真鳥を縛り。龍の頷の玉より得ぬる密書の筥を取得しは大丈夫も行ひ難き雑中の難事に。彼蘭相如が秦に使して連城の玉を奪返せし功よりも遥に優て手柄なり。是唯栗隈への忠義而已にあらず。一天の君の御為に大忠成なりと深く賞美し。藤井が父其小禄の被官なりと。即座に召加

禄と子へ眤近の武士を取立てゝ恩賞を謝し怡び更限なし
時に栗隈藤井に向ひ真鳥が行爺を問ふるに藤井答て真鳥が奪掠
先〳〵民を虐げ百済の貢物を掠取り條祈の擅に於て攫の典侍を
殺害せしまで一五一十を結ぶに栗隈申て曰く真鳥左
程迄暴悪残酷なんとは但し彼道智と申す妖僧の祈も不審なり
本人を指顕さば程の術なくば形代の動く歩む度も有まじく無心の形
代を歩ませる邪術は有まじ密書を奪ひし仇方へは寄まじ却て罪あれ
女の方へ往て無実の罪に陥るむる度こそ心得ねと言へば藤井が
曰仰せる通り妾も其度今は不審晴難けれど少し心に中り侍
真鳥殿吾倅共の人〳〵と擅に寄せ形代の歩寄仕て者こそ
密書を奪ふ科人なれとやされいへども彼法師よもさわぐの行力を

侍るまじと思落ていひふ実も其言に違ぬ祈迄るまゝに藁の形代
動ぎ出て生ある者の如く吾倅の方へ歩て寄合あり侍れ吾倅も偖
免ぐるに命と思定めし愈近寄なば非情の藁人形なりとも身の仇
敵なり只一刺に刺殺て直に自害せんものと袖の中に守刀抜かけて近寄を待
もべ〳〵ふ如何なる度ぶや後退て回の処へ入り又祈れて吾倅の方へ歩来
り侍れ今は斯なと己が首を抜んと侍時形代は急に横さまに立
吾倅の隣に坐る攫の典侍の膝へ仆るゝ如ひ真鳥殿は攫の
典侍を本人なりと思ひ無慚にも刺殺し吾倅は危ければ難と免まじ丙舎へ駆る
ひ〳〵兼て見置る路より城を通ま出て駆り侍と結ぶに栗隈嗤
と膝を拍実い〳〵致せる古結ぶに神力勇者に敵せじと褒り依て一心
必死を究て恐る処なく形代を刺通さんと思結び勇気形代に通て近

付支能ハざど。櫻の典侍ハ其身ホ科の覚なーとゝくども。邪法の奇特を心ホ怖るゝが如。其虚ホ乗じて走り付ー者なり。是邪氣虚ホ乗ずる八理ふく侭世ホ有。是と理外の理と謂り祈る者の過あるわーざど。神佛の依估あるざど。只八眞鳥短慮愚昧むく支の理非とも考る支能ど猥ホ衆ち死女殺害せー八論ずるホ足ざど。都結所八櫻の典侍ガ不運と謂ゆー。是ま一あり。ら高天你ガ忠義と感じゆひて危難と免ま一ゆ。眞鳥ガ積悪と憎て隠緒と露顕させのふなるべー。返ま〻ー你ガ勇氣才略男子も愧る処ゆう。已ホ眞鳥ガ叛逆の證據顕ま一る上百済國の使者と殺ー。慶賀の貢聘と掠取ー大罪相知られど。我晴ホ你と伴ひ都ホ上りて。草壁王ホ委細の義を言上ま一ゆー。藩中の緒士ホ上京の義を固く口外ま一ゆ。ガ昔能く言合張壮衣と調へ。藤井と兼典ホ忍ばせ。密ホ國と立て和列の都へど上りる

雅明説實剣来由　兵道智倫塾田神室

一ム角仙人ガ龍を封ざる術有も。女色ホ迷ゆ。湯武支戎過ち。司馬長卿ガ王と感ぜーむるの方有も。女色ホ溺ま一ま寿と減せー例。古今とも女乃色香ホ迷ひて大事と過る者鮮くゝざる中ホ。大友眞鳥八藤井内侍ホ戎ゆー て密書と奪ま。猶本人を知ど過て櫻の典侍を殺害ー。密書の行方知ど藤井内侍と捕得ざれど。心快くとて楽ゆど。垣の雅明其色戎ゆ〻ー練ゆる八密書紛失の義八今更悔ゆとも返ま一ざー。畢竟是大支ホ似て小支なり。詮ともる所八王位と推簒の四海と併呑ま一ホ有。然ハ軍戦乃備をなーゆ。一味の徒と猟ー合せ。先近國と攻靡け。根と強ーて九列と追ー蜃食ー。中國四國戎も伐従へて都へ攻上りゆ。御ユ支ーと肝要ホ〻ー。何ど區くとて氣と屈ーゆ。支のゆべと。舌と鳴ー と統励ー

真鳥ゟの輩に乗実も你が中でしく彼密書を證迹として叛逆人と唱へて
攻来る者有ど近向て伐散ハ乃ちきのを恐らく逃る徂我ハ其の旨あり。王位
に即んとハ先三種の神器の一ッなる草薙の剣。今尾列熱田の宮殿に納め
有とぞ。我彼宝剱を奪取んと欲させる事多年なり道智ハ諸の妙術を得る
をもて右の宝剱を暗に奪取方便ハ有まじやとう向けるに。道智完示と
赤矢拙僧が法力を以てせる時ハ九重の石櫃に蔵し物ならも代袋乃中
物を取出ごとより安くいざもあれ其剱ハ如何なる徳のなやと向。其時雅明少
し膝を進め。其義ハ君に代りて某宝剣の来歴を傳申べし仰すく語いべ。抑
彼草薙の剱と謂ハ旧名を天村雲剣と号して出雲國簸の川原に栖る
八岐大蛇といへる大蛇の尾より出さると言傳けれども是ハ日本紀の深秘に
て。其実ハ簸の川原に東賊ありて多の小賊を随へ人民の財を奪ひ命を

害す賊の首領なる者八人あり是を秘て大蛇頭ハッ有と書しぐ。右の八賊多
く乃美貌女を奪取已们が妾とし了に八殺して其肉を喰ふ然に出雲國に
手摩乳脚摩乳といふ夫婦の者ありて。女八人持るいづれも白貌合
優ましくが彼八人の賊魁脚摩乳の女七人まで奪取妾となせし後悉く殺
して喰ひ。今一人残りし稲田姫と号し女を奪取んとせしを脚摩乳夫婦是を
患ひ悲しく女を抱て昼夜哀哭なり時に其頃素盞嗚尊ハ御姉君大日
霊尊の不興を被りなひて。都を追遜れなひ。諸國を流浪ありて出雲國
に到りなひ賤が家の外面を過りなふに。家内に頻に哭声有と異く内に入し
其故を向なふに。脚摩乳夫婦八賊の稲田姫を奪取んとせる由を語られむ
尊ゟ你们愁る事勿れ我其賊を殺して你が女を救ひ得させんと。但し
多く酒を用意して彼八人の賊来らせ稲田姫に酌をさせ八賊に酒を強勧

醉卧しめよ。其熟く眠る頃、我悉く殺し尽さんと仰せらるゝ。脚摩乳
夫婦限なく悦び八の瓶小酒を湛へ彼賊の来る迄待尊八帳の蔭に忍び
窺ひ居る。其夜果して八人の賊来りて稲田姫八挺を凝して見えと迎
八賊小酒を勧めば賊共大小治び飽きて呑喫して小酔仆て去り日乃
殘。素盞嗚尊身を現して躍出でゝ悉く賊を斬殺しゝ。茲に八人目乃
賊八眼を覚し尊と闘ひ居る小尊の剣賊の剣と撃合しゝ。と比べ二小折
られ。尊八勇猛にして小賊を殺しゝ。其剣を抜て見ゝ小比なる名
剣なり。尊八大い小賞美しゝ。時小脚摩乳語る。此賊共の掘る所常小雲
氣立ひ八此名剣の奇特小ゝ小ゝ。尊も茲なるべしと宜ひて
是より天村雲剣と号て自身帯しゝ。八人目の賊の持し所なる大蛇の尾
より出でゝと書しあるべし。斯く尊八翁夫婦の願小任せ稲田姫と娶ひ
宮造して稲田姫と住ひ給ふ。倭歌と詠じ給ふ

八雲立つ出雲八重垣妻籠小八重垣を作る其八重垣

此御歌より倭歌の文字三十一字小定りしと。尊八先非と改めゝ給ひて再
び高間原の都小上り給ひ御姉天照皇太神小罪と謝ゝ給ひ天村雲剣を献り
給ふ。姉帝剣を睿覧して不審ゝ給ひ此剣八吾所持せし剣何者か奪去て
失ひ給ふ。再び得て御悦ひ給ふ。是より此剣帝の神宝となり神
璽宝剣八咫鏡を日本三種の神器とハ申せり。其後人皇の御代となり給ふ。十二
代目景行天皇二十年春二月天照皇太神の神霊と伊勢國度會郡山田
ク原の五十鈴川上小鎮祭ア。村雲の剣を神宝ゝ倭姫と号し祭主ゝ
給ふ。今の内宮是なり。茲小其頃東國の夷王命小帝ハ列邪共侵し給ふ依
帝皇子日本武尊小勅して東夷と征伐せしめ給ふ。日本武尊父符鍵を賜て

都を発足伊勢國に到り太神宮の神殿に詣でゝ東夷征伐の功を遂させ給へと祈りまゐ祭主倭姫を尊の姨君なれば御暇乞のため御對面有て倭姫神宝なる天村雲の御劔を尊に授まゐ此宝劔は天照皇太神より傳り今此宮の神宝なりとゝ雖も御身に授るなり此劔の德を借て夷賊を伐平げ芽出度凱陣しなゝと仰られ給へ尊大に悦びまゐ宝劔を拜領あらせ勢列を整て駿河國浮島が原に到り給へ夷賊共日本武尊の武勇絶倫なるを聞て知詐の謀を以て討んと仮に降参し尊に向ひ此原に鹿猪充て多くいる御尉に狩しなゝと欺られ給へ尊信なりと思召草高く生茂り野原に入給へ夷賊共是を囲まると四方より火とりけて焼討にせんとす尊賊の爲に欺られしと後悔しなゝ如何せんと猶豫給へ村雲の劔己と拔出御前の草を雑拂ひ給へ是に國て不測に燃る火を避給へ燧を取出し

火を切出して草を焼給へ其火に連て以前の火も賊の方へ燃往て賊を焼殺し給へ後世向に火きらる夷人より始り武士の刀に燧嚢を著る夷し此時より始り給へ然て草を雑し給へ村雲の名を改草薙の劔と号し給へ斯て尊は駿河の賊を伐平げ遠江の海上を船にて渡給へ俄に悪風吹出し御船覆らんとす尊の后妃橘媛龍神に祈誓をとゝけ海中へ船入て死し給へ依て風止浪治りて御船無なく著岸し東夷を悉く平げ給へ尾張國に凱陣あり國司の女宮酢姫に契を結給へ吾部へ既に必ず你と迎取給へとて宮酢媛に草薙の劔を預け後の證とし給へ尊は張と立て近江國へ上り給へ伊吹山の邪神と平んとて山中へ入大蛇と逢給へ多の小蛇の毒氣に觸病を得給へ草薙の劔を尾張に留置給へ田村の熱田の宮の神宝となりて彼神殿に納給へと

積く結りくるふゞ。道智大らふ感じ。左程ふ霊威ある名劍あるべ拙僧其
熱田の宮へ到り。法力どいく。彼劍を奪取て立飯り君ふ捧ぐべ。と爰も
ふ言ふ。其島斜ふ向ふ。悲の道智と行脚僧の体ふ紛れ衣せ路費ふ
ふ与へ尾州へ走せくる。斯て道智豊後と立く中國幾内を通過尾張
國熱田の宮ふ著。社司ふ對面し。拙僧ハ諸國の神社佛閣を巡拜する僧ふ
ていぶ。當社ハ多く神徳灼然ふ在をと承るゞ。一七日参籠し法絶を願り
度ゆと願しやふ言くるふ。社司何の心も付ゞ。法絶とあれゞ隨意ふせるべ
と許し給ふ。道智怡び神殿ふ入る。法華経を高声ゞ讀編し給ふ。社司も
道智が奸計ハ知らゞ。実の信者かと思ひ飯ふ式与ふ立とも道智経
と一飯をも受ゞ貪道ハ無比の大願有く。何ゞ此の宮寺ふて一七日参籠の
間ハ断食不睡ふく讀編いと偽り。暗ふ不飢奇薬を服し。昼夜眠を

凌で法華経を讀編くるゞ。社人們益感じ。世ふ奇特の僧も有
て最殊勝ふゞ思ひくる。然ふ當社の神宮大宮司より毎夜社人五人
宛神殿の御帳の外ふ直宿させくる。是神宝の御劍守護の為なり
道智ハ透間あらゞ宝劍を盗取んと窺へゞ。右の如く守り厳重あれゞ
容易手を下しくゞ。猶も尊げふ昼夜法華経を讀編して社人ふ氣を許
さしめ。第五月の夜の四更頃秘密の咒文を唱へゞ。直宿の者邪術の為ふ
頻ふ眠り萌し。果ハ皆眠仆て鼾の声ふく喧しくる。道智さもうそと独
笑し。邪術を以て一疋の鼠と変じ。おそや御帳の内へ入んとする。廣前の鈴
物も障ざるふ断落し。枚數ふ嗔ゞ響くるゞ。眠伏る社人們音ふ驚き
眼を覚しくるふ。道智ハ仕損ずと早く本相ふ立ち返り。休ふて經を編
しくり。社人們を神鈴の落しを深く怪まゞ。何故落しとも知られず。左右して

旦のごとく鈎整し其夜へ程なく明ぬる。偖六日目の夜廿儀頃ハ道智又咒文と
唱て社人を眠伏せ怪異と身を変じ御帳の内へ入んとする小此度神前
の顎噛と落て社人を強く咬て皆目を覚し起く其後も盗賊ハ
社人ハ是神霊の賊有と知ながらハ猶ハ道智の心肝小徴し弥剣
の霊徳を好み思ひ猶も精心戒励して経を續編し第七日目の夜深更
小又例のごとく咒語を唱て直宿の者を悉く眠卧せ再三怪異と変じ難か
く御帳の内へ潜入三重の筵の鎖を開て錦の袋小納たる宝剣を伐奪
小奪取を出て者せ袈裟を推捲神殿を抜足して早ハ明ぬる夜小紛
れて落失る。それ邪心悪念とらへども一心不乱小凝れば其念一度を通
ざるなしひたすら異国の妖僧吾神国の神宝を奪去る。大膽も不敵も云
大伴金道忠孝圖會後編巻の四畢